

2011年冬鳥ウォッチ報告

バードリサーチ

2011年の冬（以下今冬）は、野鳥観察者の中で冬鳥の少なさが話題にのぼり、冬鳥の減少を危惧する声が聞かれました。実際、バードリサーチが実施しているベランダバードウォッチでは、ツグミやシメ、シロハラの記録率が例年より低い結果が得られています（http://www.bird-research.jp/1_katsudo/veranda/2011w.pdf）。ただし、ツグミでは2月下旬には例年と同じように記録率が高くなり、一時的なものであることが示唆されました。一方で、アトリやマヒワなどのより山沿いの樹林地帯などに生息する冬鳥たちや農耕地や疎林に生息するカワラヒワやカシラダカの生息状況はどうだったのでしょうか。さらに今冬の冬鳥ウォッチは、こうした冬鳥たちの生息状況を把握できたのでしょうか。4月10日までに届いた情報を基に今冬の渡来状況をまとめました。

調査状況

今冬は、25名の方から合計64件の情報をお寄せいただきました。調査対象種の6種の情報件数の合計は、95件で調査初年度の2006年冬に次ぐ少なさでした（図1）。地域別の情報件数は、今冬もやはり関東が多く、全体の60%を占め、次いで中部地方が22%、近畿地方7.3%の順でした（図2）。昨年情報の無かった北海道や東北地方からは、それぞれ4.2%とわずかですが情報が寄せられました。その一方で、中国地方や四国地方からは情報がまったく得られませんでした。

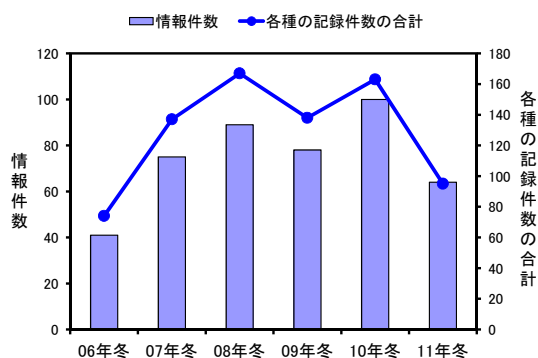


図1. 冬鳥ウォッチにおける情報件数および種ごとの情報件数の合計の推移

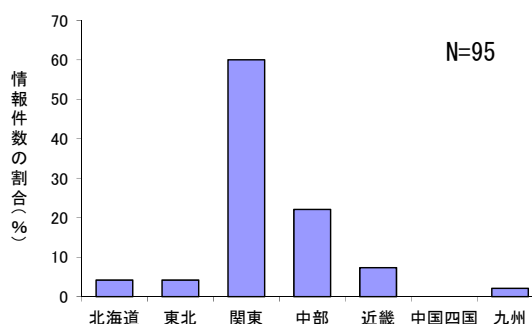


図2. 2011年冬期の地域別情報件数の割合

記録状況

今冬の記録種は5種で、今冬もイスカの情報はまったく得られませんでした。情報件数の多い種は、カワラヒワが最も多く39件（全体の41.1%）、次いでアトリ27件（30%）、カシラダカ22件（23.2%）でした。一方、マヒワはわずかに4件（4.4%）、ハギマシコ3件（3.3%）と少数でした。図3に全情報件数の合計に対するそれぞれの種の情報件数の割

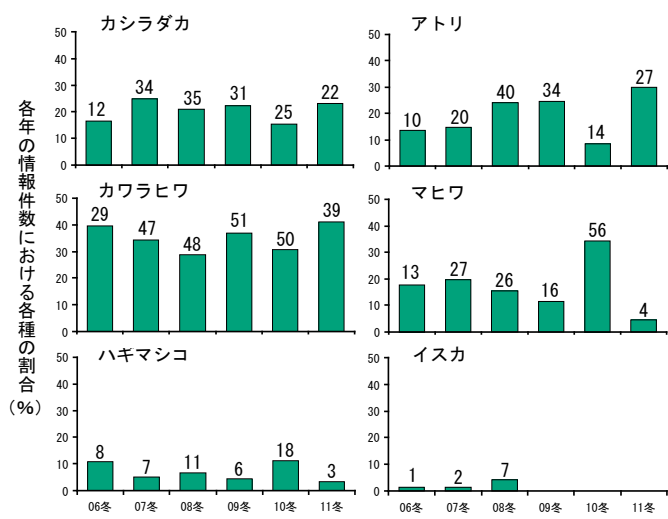


図 3. 各種の情報件数の割合の推移

各年の情報件数 2006年：73 2007年：137 2008年：167 2009年：138 2010年：163 2011年：95

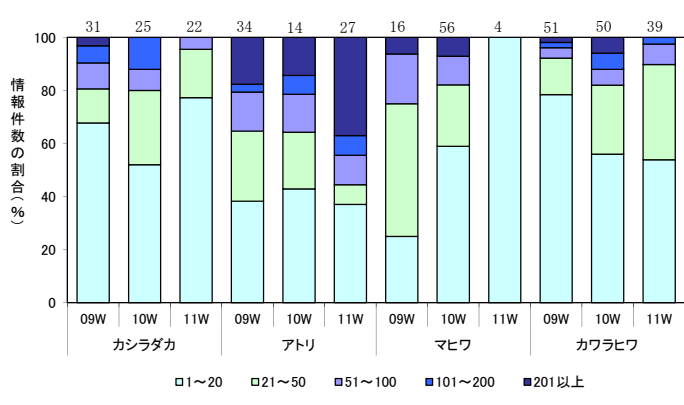


図 4. 2009年冬以降の3年間の主要な4種の個体数ランクの割合。グラフの上の数字は情報件数を表す。

合（以下記録率）の経年的な推移をまとめてみました。今冬の記録率を昨年までと比較すると、カシラダカやカワラヒワではあまり大きな違いはありませんでした。しかし、アトリでは情報件数でも10年冬より多く、記録率は08年冬（24%）や09年冬（24.6%）より高い値でした。一方で、マヒワは調査を開始した06年冬以降最低の記録率でした。また、昨年やや記録率が高かったハギマシコも、再び減少していました。

次に各種の個体数ランクを09年冬以降の最近の3年間で比較してみました（図4）。今冬のカシラダカとカワラヒワの個体数ランクは、どちらも0~20羽や21~50羽の割合が多く101羽以上の大きな群れが著しく少ないことがわかりました。カワラヒワでは、10年冬に201羽以上の大きな群れの割合が少し増えましたが、今冬はまったく記録できませんでした。さらに、今冬のアトリは、09年冬や10年冬と様子が異なり201羽以上の大きな群れが37%と多くを占めました。記録の中には10,000羽以上や50,000羽以上といった大きな群れの記録もあり、複数の地方から300羽以上の大きな群れが記録されました。一方、情報件数

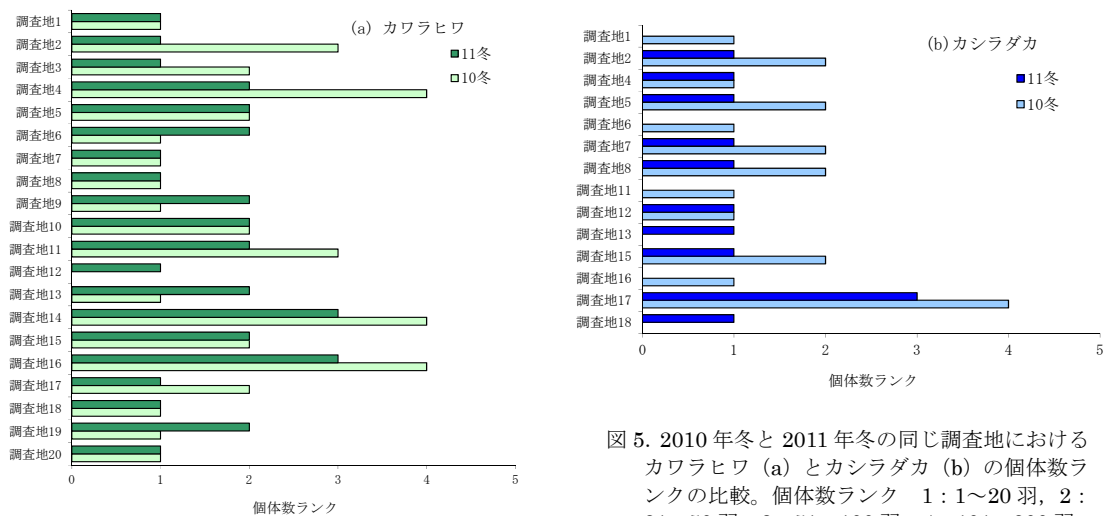


図 5. 2010 年冬と 2011 年冬の同じ調査地におけるカワラヒワ (a) とカシラダカ (b) の個体数ランクの比較。個体数ランク 1 : 1~20 羽, 2 : 21~50 羽, 3 : 51~100 羽, 4 : 101~200 羽, 5 : 201 羽以上

が著しく少なかったマヒワは、情報件数ばかりでなく個体数ランクでもすべて 1~20 羽の小さな群れの記録だけでした。しかも、4 件中 3 件は北海道の記録でした。

以上のように、今冬はカシラダカやカワラヒワでは大きな個体数ランクの群れが少ない傾向がみられ、逆にアトリでは大きな群れが記録されました。ただ、今冬は情報件数が少ないため、見かけ上の変化の可能性もあります。そこで、毎年記録件数が多いカワラヒワとカシラダカの個体数ランクを昨冬と今冬と同じ調査地 20 か所で比較してみました。まず、カワラヒワでは、20 か所の調査地で少なくともどちらかの冬で記録されました (図 5-a)。このうち、10 年冬では 19 か所、11 年冬では 20 か所で生息が記録され、生息地数の上では年による違いがないことがわかりました。また、個体数ランクを 5 段階で表して同じ調査地同士を比較すると、10 年冬のほうが 11 年冬より多い調査地が 6 か所、逆に 11 年冬の方が 6 か所となり両年で有意な違いは得られませんでした (ウィルコクソンの符号付順位検定, $P>0.334$)。同様に、カシラダカでは少なくともどちらかの冬に生息が確認された調査地が 14 か所あり、そのうち 10 年冬が 12 か所、11 年冬が 10 か所で記録され両年でほとんど違いがありませんでした (図 5-b)。しかし、カワラヒワと同じように同じ調査地同士で個体数ランクを比較すると、11 年冬では 10 年冬より有意に少ないことがわかりました (ウィルコクソンの符号付順位検定, $P=0.021$)。なお、マヒワやアトリも同様に同じ調査地で比較すると、マヒワは 10 年冬には 20 か所中 13 か所で記録されましたが、11 年冬では記録された調査地がありませんでした。さらに、アトリは 10 年冬には 20 か所中 1 か所で記録され、11 年冬では 4 か所で記録されました。



アトリ (撮影 : 大塚啓子氏)

ところで、アトリの情報件数は08年冬と09年冬にも多く得られました。特に、08年冬では昨年のマヒワのように平地の雑木林や市街地の公園にも出現しました。しかし、今冬のアトリは大きな群れが記録されたものの、あまり公園などの小規模な林での記録が多くありませんでした。そこで、情報に記載された環境をもとに08年冬、09年冬、11年冬の大まかな環境別の記録状況を

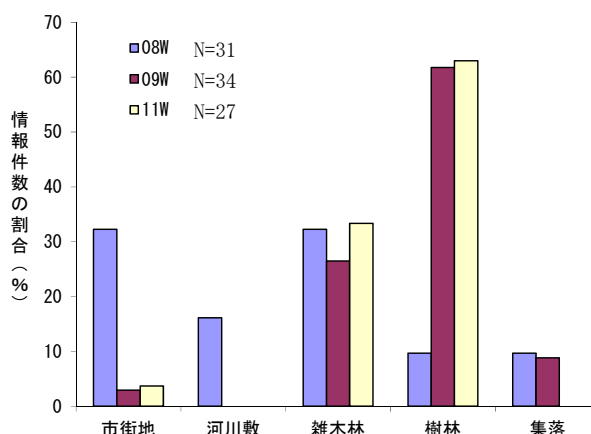


図6. 2008年と2009年、および2011年のアトリの大まかな生息環境の比較

比較してみました(図6)。すると、08年冬では市街地や河川敷、農耕地と言った小規模な林の割合が多い一方で樹林地帯からの割合が少ない傾向にありました。逆に、09年冬と11年冬では市街地の記録が著しく少なく、樹林地帯の割合が多いことがわかりました。したがって、今冬のアトリの飛来状況はやはり08年冬とは違って、09年冬と同じように樹林地帯に多かったことがわかりました。

まとめ

以上のように、今冬は参加者数、情報件数とも大変少なかったのですが、それでも冬鳥たちの渡来状況の変動をある程度の確に把握することができました。やはり今冬の特筆すべき結果は、マヒワが大変少なかったこととアトリの大きな群れが記録されたことです。昨冬のマヒワは、少なくとも情報が寄せられた関東地方から近畿地方、九州地方では市街地付近に多く生息していたことがわかりました。しかし、今冬は市街地の公園や丘陵ばかりでなく、山沿いの樹林地帯からもほとんど情報が得られませんでした。このことは、10年冬と今冬と同じ調査地を比較しても明らかでした。やはり、今冬はマヒワの飛来数が著しく少なかったのだと思われまます。そして、改めてマヒワの変動の大きさに驚かされます。ヨーロッパでの標識調査によると、マヒワは同じ個体であっても翌年には前年の繁殖地から3,000 kmも離れた場所で繁殖することが知られています(Newton 2006)。これは、食物となる針葉樹の種子の豊凶と関係していることがわかっています。マヒワは本州中部以北の山地帯でも少数が繁殖していますが、日本に飛来するマヒワの繁殖地がどこか良くわかっていません。しかし、ともすると今冬の少なさは、食物の関係で日本から遙か離れた場所で繁殖したために越冬地が変わり、本州以南へはほとんど飛来しなかったのかもしれない。なお、今冬のマヒワの状況は、日本の森林にマヒワの食物となる木の実が少なかったために、秋に渡ってきたものの素通りしてさらに南へ移動した可能性も考えられます。しかし、10年冬では11月ごろから平野部で記録されたのに、今冬では秋口にも観察されて

いないようです。したがって、素通りした可能性は少ないと考えられます。

一方、アトリは当たり年だったと言えそうです。ただし、今冬は、その多くが山地や山沿いの森林地帯で記録され、市街地付近での記録はさほど多くありませんでした。アトリの大きな群れの情報は11月ごろから個人的に寄せられていました。そのため、今冬は飛来数が多く、しかも山地の森林などに木の実が多いことからそのまま留まり、平地まで降りてこなかったと思われます。同様に、バードリサーチが別に行なったツグミウォッチやペランダバードウォッチでも、ツグミは秋口から初冬にかけて山地や北日本に多く、2月ごろになって平地で多くなりました。これも、山地の森林にツグミの食物が多かったためと考えられています。なお、アトリの情報が寄せられた地域は東北地方から関東、近畿地方、中部北陸地方からでした。今冬は08年冬に情報の多かった九州地方からは情報が得られませんでした。このことから、アトリの群れの南下は本州中部や近畿地方で止まっていたのかもしれない。いずれにせよ冬鳥ウォッチは、マヒワやアトリの越冬状況を的確に把握できたと言えるのではないのでしょうか。

ところで、今冬はアトリやマヒワの渡来状況の変動に隠れてしまい、カワラヒワやカシラダカが霞んでしまいました。カワラヒワやカシラダカでは全体の情報に基づく大きな群れが少ない傾向がありました。しかし、今冬のカワラヒワは10年冬と同じ調査地同士で比較すると個体数ランクに有意な違いがありませんでした。一方、カシラダカは今冬の方が有意に少ないことがわかりました。しかし、比較にもちいた調査地の多くは関東地方に位置しています。また、調査地数もカワラヒワで20か所、カシラダカで14か所です。ですので、これらの種で実際に個体数上の変化があったのか、それとも無かったのかは、さらに多くの情報をもとに地域別、環境別の解析が不可欠です。

さて、今冬の冬鳥ウォッチは、参加者や情報件数が調査開始以来2番目の少ない年になってしまいました。マヒワやアトリ（おそらくイスカやハギマシコも）のように市街地や人里近くの疎林などにあまり多くない種では、身の回りに多く出現したときには観察者の興味を引き、情報として報告され易いと思われます。しかし、カシラダカやカワラヒワといった身近な鳥たちでしかも著しい変動のない種の場合には、目を向ける観察者が少ないと推測されます。こうしたことから、今冬は情報件数が少なかったのかもしれない。カシラダカは、標識調査によると近年減少傾向にあると考えられています（深井ほか 2005）。したがって、カシラダカの生息状況の実態を早急に解明する必要があります。鳥類のモニタリング調査は参加される皆さんの多さと継続性が命です。広範囲な地域から多くの情報が何年にもわたって集まることで個体数レベルでの生息状況の変化が分かるようになります。「継続は力なり」、「塵も積もれば山となる」の例えどおりです。さらに多くの皆さんにご協力いただければ嬉しいかぎりです。はたして12年の冬はどのような冬になるのでしょうか。アトリは、マヒワは、さらに



カシラダカはどのように記録されるのでしょうか。今から楽しみです。最後に、今冬の冬鳥ウォッチにご協力いただきました皆様のご芳名を以下に記してお礼に変えさせていただきます。

石川フク，石塚文信，石濱徹，井上賢三郎，井上幹男，今森達也，植田睦之，上山義之，内田博，大塚啓子，亀山弘貴，木村有紀，久保賢一，小林俊子，小堀脩男，小松周一，齋藤映樹，高橋邦年，野中純，平野敏明，三上かつら，村田安正，森さやか，守屋年史，渡辺美郎，渡部通の各氏。

取りまとめ：平野敏明

引用文献

- 深井宣男・吉田邦雄・山口恭弘・人見潤・坂口斉・木村裕一・市川洋子. 2005. 渡良瀬遊水地における標識調査報告 (2004). *Accipiter* 11: 31-37.
- Newton, I. 2006. Advances in the study of irruptive migration. *Ardea* 94: 433-460.